全教北九州

新聞　全教北九州
全教北九州市教職員組合
発行責任者　中川喜久子
2022年3月24日

全教北九州　検索　「働き方改革と教育のICT化」特集　この新聞はすべての教職員に配布しています

「納得」と「合意」で働き方の改善に取り組もう！

「働き方改革」に管理職を含めた教職員全ての意向を反映させよう

教職員の多忙化・長時間過密労働の解消はすべての教育関係者にとって改善すべき喫緊の課題です。文部科学省は「働き方改革」推進を最優先に取り組むべき課題に位置づけ、業務の縮減を図ろうとしていますが、その成果はあがっていません。

問題の解決には、文科省・教育委員会などの「上からの業務縮減策」でなく、管理職を含めたすべての教職員の意向を反映した「納得」と「合意」にもとづいた「わたしたちの業務縮減策」に取り組むべきです。

子どもと向き合う時間を確保することを優先した働き方に

外国語・情報教育の導入、教育のＩＣＴ化に伴う新しい仕事が増えています。教育委員会は、「学校における業務改善プログラム〈第２版〉等に基づき改善できているという認識ですが、現場の認識と乖離しています。

授業研修、その他の研究・研修、調査・報告書等の簡略化、部活の指導員配置等に取り組みましょう。会議の精選と効率化に取り組みましょう。

「途中付与、一斉付与、自由利用」の原則にもとづく休憩時間の確保

わたしたちの**心と体の健康のために心身の緊張緩和や疲労回復はとても大切**です。

労働基準法第34条１項で決められた休憩時間（労働時間が６時間を超える場合においては少くとも45分、８時間を超える場合においては少くとも１時間の休憩時間を労働時間の途中に与えること）がきちんと確保できるように下校時間や給食指導などの業務・校時割りなどできるところから取り組みましょう。

長時間勤務を「個人の問題」にしない

長時間勤務が、教職員の「自己責任」や「意識の問題」に矮小化されないように、管理職と一緒に実効ある業務の縮減策を検討して実行しましょう。

日本の教員は諸外国に比べて長時間勤務となっています。ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）が２０１８年に調査した結果では、教員の労働時間は小学校で週５４・４時間、中学校で週56時間とＯＥＣＤ調査対象の平均３８・３時間と比べて大幅に超過しています。

年度当初の会議では、働き方の見直しについて話し合う時間を求めましょう。

「在校時間」の適正な把握

「在校時間」の把握では、勤務時間、業務量が適正に反映されるよう、次の視点で検証して改善を求めましょう。

①管理職の責任で適正に勤務時間の客観的な把握が出来ているか

②休憩時間や「自己研鑽」等を一律に勤務時間から除外していないか

③持ち帰り仕事を勤務時間に含めているか

④虚偽の出退勤記録の押し付けや「時短ハラスメント」はないか

⑤土日の部活動指導を「在校等時間」に含めないなどの誤りはないか

必要な条件整備を求める声を職場からあげよう

職場でできるところから業務の縮減に取り組むことは重要ですが、全教北九州は、**教育委員会の責任で全ての職場で業務の縮減をはかるべき**だと考えています。

使用者には、労働者に対して安全に働くことができる環境を提供する義務があります。（労働契約法第５条「安全配慮義務」）この義務には、施設・設備の整備、労働時間、人員配置、人間関係などがあります。

職場では、できることから取り組みつつ、教育委員会に条件整備を求める声を挙げていきましょう。

北九州の戦争遺跡

足立停車場・小倉裏線（小倉北区）

門司小倉間の海岸沿いの線路は「仮線」とする条件でしたが、１８９７年九州鉄道はこの路線を複線化し「本線」にしたいと逓信省に願い出ます。陸軍は、九鉄の負担で富野から分岐、小倉市街地南側を経由し行橋・八幡方面に接続する線路の敷設、小倉市街地南東に軍用列車３本が同時に乗降できる大停車場の建設を条件に同意します。この路線は「小倉裏線」、停車場は「足立停車場」と命名され、１９０４年２月12日に開業しました。開業２日前に始まった日露戦争をうけて、第12師団はこの駅から長崎経由で朝鮮半島に派兵されました。駅は輸送が終了した19日に閉鎖、その後は必要に応じ使用するとしましたが１９１６年に廃止されました。

神嶽川から三萩野交差点に至る駅跡地は足立中学校、北九州中央郵便局、小倉公共職業安定所などに利用されています。また砂津三萩野間の国道３号線は線路跡をほぼ踏襲しています

「かゆいところに手が届く」あるいは「監視」のためのものすごく便利なもの
ICTが子どもたちにもたらすもの

スマホで何でもできてしまう便利な時代になりました。しかし、自分の位置は常に記録され、ネット検索すれば、検索履歴からその人の嗜好や思想など類推され、ネット通販サイトから「おすすめの商品」が提案される。これは、個人のあらゆるデータが蓄積・分析され活用される時代でもあります。

「GIGAスクール構想」で学校にもその時代が訪れようとしています。子ども時代の成績・行動・病歴などが蓄積・分析され、人生のあらゆる場面で「活用」されるとしたら・・何か怖くないですか？

子どもに端末一人1台の時代がやってきました。

全国の情報交流によると、子どもの端末や保護者のスマホから次のようなことができると言われています。

お知らせはスマホで

▼欠席、検温の連絡、学校からのお知らせや学級通信等の配信・閲覧。学級通信もテキストベースと写真に変わるかも

▼家庭訪問や懇談の日程調整（自動的に調整できる）

▼アンケートの配信と集計（記述以外は瞬時に集計される）

▼提出物の配信と提出状況の把握（電話や連絡帳が不要に）

▼オンラインでの学級懇談会・PTA会議

▼部活動の連絡（出欠や試合結果報告など）

子どもと家庭のデータを全教職員・管理職・教育委員会で「見える化・共有化」

▼子どもはその日の健康状態を入力、さらに心の状態を「はれ・くもり・あめ・かみなり」などで表現する。雨、雷の状態や欠席・遅刻の場合は、アラートが表示される。

▼子どもに関わった教職員が、その子の「いいとこみつけ」に入力

▼学級ボードや児童生徒ボードでは、子どもの出欠状況、保健室利用状況、活動記録、学習状況など様々な情報が一覧表示される。

▼「家庭のようす」では、家族構成や連絡先、個別の配慮すべき事項が確認できる。

▼「個別の教育支援計画／個別の指導計画」で、支援が必要な子どもの情報を共有

子どもの様子は端末で把握

▼宿題の配信と提出（写真を撮って提出）、提出状況の把握。ノート点検も同様

▼テストの採点は答案をスキャンして串刺し採点（一人ずつではなく問題ごとに採点）、記号は自動採点。自動集計と細かい分析。端末で一斉返却（答案用紙は返却または処分）

▼授業中に子どもの表情を見なくても教師用端末を見れば、子どものとりくみ状況や何をやっているのか、全員の様子が把握できる

▼教師から提示された問題を解いたら、AIが説明し、次の問題を提示。

▼担任と子ども、子ども同士の連絡はチャット、SNS・メールを使用

これはわたしたちの目指す教育なのか

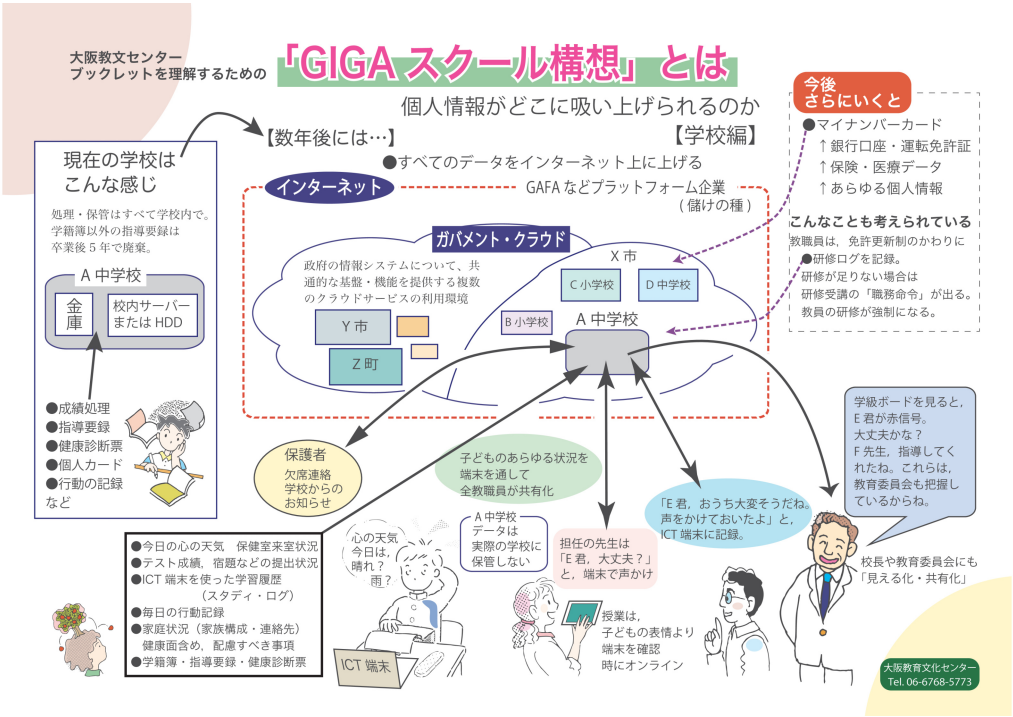
北九州市ではまだ一部ですが、このようなシステムを多くの自治体が導入しようとしています。

端末が宿題等の提出点検だけではなく、問題が解けた子どもに次の課題を提示してくれたり、テストの採点作業も簡便になれば、便利なのかもしれません。

また、子どもの様子も端末から瞬時に把握、しかも全教職員が共有し、子どもの学習や生活指導で連携できるというのです。しかし、端末を見るよりその子の顔を見て声を聞くことが先ではないでしょうか

今後「GIGAスクール構想」がすすんでいけば、一人ひとりの子どもの保健上のデータや行動の記録、学習成績ばかりではなく、端末を利用すればその時におこなっている操作や状態が「スタディログ」としてクラウドに保存されていきます。端末を利用すればするほど、子どもたちの日々の行動や学習記録が蓄積されていきます。これらのデータはどのように活用されるのでしょうか。

子どもと向き合うより端末に向き合う時間が増えるようで、私たちが目指している教育とは大きくかけ離れているとは思いませんか？



「GIGAスクール構想」のイラスト図解（大阪教育文化センター）
https://osaka-kyoubun.org/archives/4682